【新聞活用学習】　全校／国語科・社会科

「ことば」を育む授業の創造　～新聞の教材化の可能性～

指定校１年次　上田市立第二中学校　倉科 宗和　下平 健吾

（１）本年度のＮＩＥ活動の概要

本年度は、新聞活用教育の目標を「新聞を活用し、日常生活に関わる社会的事象に対する関心を深めるとともに、記事について自分の考えをもち、表現していく態度を養う」として実践を行った。活動内容としては、全校の目に付く場所に新聞コーナーを設け、新聞記事に対して生徒が意見を書いたり、見あったりできる場を設定することや、国語科や社会科を中心として単元構成の中に新聞を活用する場面を位置づけ、新聞を教材や資料として活用した授業への取り組みを行った。成果としては、新聞に興味をもち、自分の考えを発信していく機会となったことや、新聞を活用する中で記事に使われている言葉に着目したり、記事に書かれた人々の思いを参考に社会的事象を考えたりすることができた。一方で、新聞を活用し生徒同士が意見を交換し合うことや、生徒が自主的に新聞を読む中で課題や問題を投げかけていくような態度を育成していく場を設けることが課題として見えてきた。

（２）本年度のＮＩＥ活動の取り組み状況（４月時点）

本校は全校生徒２６８人であり、どのクラスにも３０人前後の生徒が在籍している。学級数は学年に３クラスずつの９学級あり、ほとんどの生徒が日常的に新聞を読んだことがない。読むとしてもテレビ欄や４コマ漫画を眺めたりするだけで、新聞の記事を読み、社会的事象や自分たちに身近なことに興味・関心をもつことが少なかった。また、職員の新聞活用も盛んには行われておらず、「新聞記事をどのように扱えばよいのかわからない」「新聞を教材として扱うための教材研究を行う時間の余裕がない」というような声もあがり、授業の中で新聞を使うことはあまりなかった。

（３）ＮＩＥ活動のねらい（育てたい力）

本年度の全校研究テーマは「言葉を育む授業の創造～敬愛・窮理・実践の観点から～」としている。敬愛・窮理・実践とは、学校目標にも掲げられており、豊かな心でさまざまなことに興味をもち（敬愛)、探究的にそれを学び考え抜くことを通して（窮理)、自らのそれを体現していく（実践）姿である。全校研究テーマにそったＮＩＥの活動を通して、次のような姿や力を育てていく。

・新聞に興味をもち、自主的に新聞を読む態度。
・新聞記事を読み、社会的事象について自分の考えをもつ力。
・相手の考えを聞いたり見たりし、自分の考えを広げたり深めたりする力。
・新聞記事を根拠にし、自分の意見を発表していく力。
・新聞記事を資料とし、学習に役立てていこうとする態度。

（４）全校での取り組み

≪新聞コーナーの設置≫

本校の生徒は、授業で意欲的に課題に取り組んだり、グループでの活動に積極的に取り組ん

だりする姿がよく見られる。また、木曜の午後に行われる「めいりんタイム」では、生徒会主催の生徒集会が開かれ、決まった議題について、活発に手を挙げて発言し、意見を出す姿が見られる。しかし、集会の姿を見ていると、それぞれが自分の意見を出すことに終始してしまい、他者の意見を聞き、それらを踏まえて自分の考えを述べたり、他者の意見に賛成・反対したりするといった生徒同士の関わりが希薄な姿があった。

そこで、ＮＩＥで学校に毎日届く新聞記事の中から生徒にとって関心のもてる内容を話題とし、全校生徒がお互いの考えに触れ、気楽に意見交換する場を設定したいと考えた。方法としては、職員が選んだ新聞記事を全校生徒から見えるところ（昇降口から続く廊下）に掲示し、新聞記事を読んだ感想や意見を生徒がコメントカードに書いたら貼り付けられるようにした。それを１週間掲示し、その記事について出た生徒の意見をまとめたものと新しい記事を翌週に掲示し、先週の記事にどのような意見が出たのかということを見えるようにした。

【生徒の書いた付箋が日毎に増える掲示板】

生徒の半数は新聞記事を読むのが初めてであったり、今まで新聞記事を読む機会があっても意見交換を行う経験のなかったりする生徒が多いため、掲示する記事は、できるだけ読みやすく、生徒の興味・関心をひくものにしたいと考えた。そこで、新聞記事を選ぶ際には、次の３観点をもとに選ぶことを心掛けた。

① 生徒の生活環境に近い場での出来事について書かれている記事であること。
② 生徒の生活に関わる話題について書かれている記事であること。
③ 同じ中学生のことが話題にあがっている記事であること。

【生徒の実際の投稿】

〇千曲川決壊についての新聞記事

・長野は山に囲まれているので被害は小さいと思っていたけど、とても被害が大きくてみんなで協力して助けたいと思う。（２年生女子）
・自分たちが住んでいる所は、そこまで被害は大きくなかったから良かったけれど、まだ学校に行けていない人のことも考えて学校に行けることに感謝したい。（１年生男子）

海から遠く、水害には縁遠いと思っていたが、台風による川の決壊によって大きな被害が出たことによって、自分の住む地域の特性を改めて感じ取った生徒の姿や、被害にあった同じ中学生に思いを巡らせる生徒の姿が見られた。

また、「台風の被害の大きさがわかり、自分たちにできることを考えたい」という３年生の感想が生徒会に広がり、被災地の状況を調べ、さらに自分たちにもできることはないかと話し合い、街頭に立っての募金活動につながった。

そんな活動の中で生徒の付箋が賛否両論に分かれた記事があった。「ＡＩ」についてである。

そこで、付箋の色を変え、それぞれの意見を読み合い、掲示板上でディベートができないかと掲示をしなおした。するとお互いの意見の違いから再考をする生徒の姿が見られた。

○ＡＩの友達についての新聞記事（紙面ディベート形式）

・ＡＩは人間の仕事をとるなど怖いイメージがあるけど友達になれたりするのはいいと思いました。（３年生女子） ・ロボットでもそれを必要とする人もいる。だから「友達」になるとしたら、それもまたありだと思う。（１年生男子）

ＡＩがリアルタイムで人間の感情を理解することができ、ＡＩを友達として連れていくことに関して、ＡＩの技術の進歩に驚き、自分がＡＩに持っていたイメージを払拭していく生徒の姿が見られた。

賛成側の意見に対して、自分の考えを再考して付箋を書いた生徒の意見は次のようなものだった。

・人間同士でも分かり合えないことがあるのに、ＡＩとは分かり合えないと思うからいらないと思う。（２年生男子） ・道具としてＡＩはあってもいいけど、友達だと人と人の駆け引きがなくてつまらないかも。（２年生男子）

ＡＩには限界があることを、自身の日常の友達とのコミュニケーションの経験によせて理由付けを行っている。

（５）各学級での実践

【1年生・社会科の授業実践】

１年生の地理分野「世界の諸地域」におけるヨーロッパ州の学習において、「イギリスのＥＵ離脱」について考える際に、新聞記事を資料の一つとして使用した。ＥＵの特徴について学習した上で、イギリスがＥＵから離脱することの利点やＥＵに残留することの利点について、新聞記事などの資料をもとに調べ、残留するべきか離脱するべきか、根拠を明確にして自分の考えをまとめさせた。まさに今イギリス国民が直面する課題を取り上げることで当事者の立場に立って考える姿が見られた。

◎単元名　『世界の諸地域』　教材名『ヨーロッパ州　―国どうしの統合による変化―』

◎主眼　　イギリスがＥＵを離脱しようとしていることを知った生徒が、ＥＵに残留することの利点やＥＵから離脱することの利点に目を向けながら、さまざまな資料をもとに考え、友と意見交換することを通して、根拠を明確にして残留すべきか離脱すべきか自分の意見を述べることができる。

◎指導上の留意点

・歴史的、経済的な視点だけでなく、移民の視点も加えてＥＵに残留することの利点やＥＵから離脱することの利点について考え、根拠を明確にして自分の意見を説明できるようにする。

9版　2016年（平成28年）6月25日　土曜日　信濃毎日新聞

英市民 明暗くっきり

EU離脱 国民投票決着

残留派

24日、EU脱退が勝利した英国民投票の結果に肩を落とす残留派＝ロンドン（ロイター＝共同）

離脱派

24日、ロンドンでEU離脱派が勝利した英国民投票の結果を喜ぶ支持者（ロイター＝共同）

悪夢のようだ

独立記念日だ

使用した新聞記事の例 2016年6月25日付 信濃毎日新聞

【２学年・国語科の授業実践】

国語科における学習指導要領には２学年の「Ｃ読むこと」の指導事項の中に、「観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること」と書かれており、目的に応じて書かれている文章の表現の仕方を「評価しながら読む」力をつけていくことが大切になることが分かる。実際に、昨今の長野県の高校入試の問題を見ても、古典の文章がそのまま出題されることは少なく、詩や漢文に関連した別の文章が補助資料として載せられていることが多い。生徒たちは、そのような複数の文章を比べる中で表現の違いなどに気付き、そこから自分がどのように感じたのかを考えていく問題も多く出題されている。また、昨年度、「根拠を明確にして自分の考えをもち、それを伝え合う生徒の育成」を目指して、竹取物語と今昔物語の読み比べを行った。その中では比較することで表現の工夫に気付いたり、その違いや表現の工夫を根拠として竹取物語の魅力を語ったりすることのできる生徒の姿が見られた。更に単元の終わりの生徒の感想には、「古典の文章だけでなくさまざまな文章でも読み比べをしてみたい」という声もあり、古典文章だけでなくさまざまな場にあった「ことば」をもとに考えをもたせたいと考え、このテーマを設定した。

◎単元名　　特設単元『何かが違う!?「平成」と「令和」の記事 』・２年

◎主眼

「印象の違いは二つの記事の書き方の違いにも表れているのか」について、観点を明確にしてそれぞれの工夫と効果を考えた生徒が、工夫や効果の共通点や相違に着目し、それを確かめ合う活動を通して、記事の書き方からも読み手の印象が変化することを理解することができる。

◎指導上の留意点

元号が「平成」から「令和」に変わったことは、生徒にとっても大きなニュースであり、新聞も大きく取り上げている。同じように元号が「平成」に変わった時も新聞では大きく取りあげ、多くの人の関心を集めた。この２つの元号改正の大きな違いは、天皇の死後に元号が変わったのか、生存中だったのか、記事を読み比べてみると、その違いは写真や見出しの文字からも一目瞭然である。この２つの記事を読み比べることを通して、記事の表現の違いから、どのような効果が生まれるかに気付かせたい。

【1989 年 1 月 8 日付信濃毎日新聞 総合 1 面】

【2019 年 5 月 1 日付信濃毎日新聞 総合 1 面】

使用した新聞記事の例

（６）生徒の反応

【１年・社会科授業実践での生徒の反応】

◎授業の様子

＜残留派の考え＞ ・ＥＵに入っていればアメリカなどの大国にも並べる力がもてる。経済面では関税がないのも大きい。 ・二度と戦争を起こさないようにと願いを込められて作られたＥＵから出るべきではない。 ・移民が多くても、国としては良いことは結構あると思う。ＥＵから離脱しても、移民は不法入国のような形で入ってくるのではないか。 ・移民が増える分税収は増え、さまざまな仕事に就いてくれるので、安定すると思う。 ・ＥＵ内でのつながりがあるからこそ、イギリスは貿易をさかんに行える。現在、貿易額の半分以上を占めているＥＵ内貿易が、離脱するとどのように変わるかがわからない。
＜離脱派の考え＞ ・移民が増えることで病院の混雑や学校の不足が問題になる。増やすと負担が大きくなる。 ・離脱することで、イギリス人の働く機会が増える。 ・ＥＵのルールに縛られて自国の思い通りに政治を行えないこともあるし、ＥＵに多くのお金を予算として出しているのに、自国のためになっていないという不満がある。

◎ふり返り

ニュースやテレビ番組で見聞きしていた生徒が多く、タイムリーな話題を扱ったことがよかった。イギリス国内でも立場によって考えが分かれ、今後どうなるかわからないことに対して、手元にある資料をもとにして考えようとする姿が見られた。グループで残留の利点や離脱の利点を伝え合うことで視野が広がり、自分の考えに取り込もうとする姿が見られた。

しかし、全体追究の時間が少なく、丁寧に内容を整理することができなかった。離脱か残留かで揺れ動いていた生徒もいたため、生徒同士で考えを伝え合う時間をとってもよかった。グループワークのまとめでホワイトボードを活用するなど、効率よく進められる方法を考えたい。

【２年・国語科授業実践での生徒の反応】

◎授業の様子

第１時における単元の導入部分では、「最近の大きなニュースは何か」という教師の発問に対し、生徒はすぐに「元号が令和に変わったこと」と発言した。しかし生徒の話を聞く中で、新聞の記事をしっかりと見たことがないということが分かり、生徒たちはどのような記事なのか興味をもった。そこで、教師から令和に元号が変わった５月１日の新聞の記事を示すと、生徒たちは写真や見出しから「明るい雰囲気である」「年越しのように家族で楽しそう」という印象をもった。その後、「平成はどうだったのか」という疑問をもった生徒に対し、平成の記事を示すと「ちゃんとしている」「暗い雰囲気」というような印象をもった。そこで「どうしてそのような違いが生まれたのか」という教師の発問から、「平成は前天皇が亡くなってしまった」「令和は前天皇が生きている」という発言が生徒から出た。このように、これまでの背景を念頭におき、生徒たちはそれぞれの記事の第一印象が記事の表現の違いにも表れているのかもしれないと見通しをもつようになっていった。

続いて、第２時では、教師が作成した２種類の学級新聞をもとに、どの観点で記事を読み比べていけばよいのかを考えた。そこから、「主語」「話し言葉の有無」「文末表現」を観点に、個人で記事を読み比べ、その違いからどのような効果が生まれるのかについてまとめていった。

第３時では、違う観点で読み比べた人や、同じ観点でも異なる効果をまとめた人などで４人グループを組み、その中で自分が観点を絞って見つけた違いから、どのような効果が生まれたのかを確かめ合った。

それぞれの観点で見つけた違い(工夫)とその効果をグループごとにお互いに発表する中で、自分の見つけた工夫によって読み手の感じ方がどのように変わるのかを発表する姿があった。

しかし、自分の見つけた工夫とその効果を発表した後、話し合いが終わってしまう生徒の姿が見られた。机間指導する中で、教師から「同じ観点で見つけた違いだけど、〇〇さんと△△さんは違う効果を読みとっているね」といった声がけや、「違う観点でも、同じ効果が読み取れるね。なぜだろう」といった声がけを行っていくと、自分が読み取った違いを、新聞を使って質問する姿や改めて説明していく姿が見られた。

【M生の振り返り】（平成に人物の主語が少なく、令和に人物の主語が多い違いにふれて）
主語が変わることによって雰囲気や登場人物の気持ちの感じ方が違うということが分かった。話し言葉が入っているかどうかでは平成の入っていない方が（天皇が）亡くなっていることが明確でわかりやすい。主語と話し言葉を比べてみるとどちらもおめでたいという気持ちやめでたくないという気持ちが表れていて感じ方が似ていると思った。

その後の単元展開では、自分の見つけた違い（工夫）を根拠にして、感じ方の違いを文章で表す活動を単元のまとめとして行った。M生は「話し言葉があると、天皇が生きている様子がよくわかる。天皇の思いがよくわかる。また主語では人物を主語にするとおめでたい気持ちがよくわかる」と、自分やグループの友が見つけた工夫やその効果を書いたところで、「ここから何を書いてよいかわからない」と悩んだ。そこで、教師側から「その工夫や効果が、平成や令和の記事を最初に読んだ時の印象とどうつながるか」と発問したところ、「△△さんに聞かないとわからない」と進んで前時のグループの友の席へ行き、感じた効果がどう印象につながるのかを質問する姿が見られた。

◎振り返り

本単元から、新聞の記事に使われている「ことば」に着目させ、観点を決めて２種類の記事を読み比べたことが、生徒は感じ方の効果を言語化し表現することにつながったのではないかと考えられる。

しかし、本時（第４時）で生徒のグループ活動が止まってしまった要因として、記事の工夫から読み取れる効果と、記事の印象がうまく結びついていないことがあるのではないか。そこに意識を向けさせることで、印象の違いを、自分や友が見つけた工夫や効果を根拠にして説明できるようになるのではないか、とも考えられる。

新聞記事の表現の工夫から読み手にどのような効果が生まれるのかを考えた本単元であったが、今後も説明的文章や物語を読む中で表現に着目し効果を読み取ったり、書き手として文章を書く時に工夫したりすることにつながるよう継続して指導していきたい。

（７）成果と課題

本年度は新聞活用教育の目標を「新聞を活用し、日常生活に関わる社会的事象に対する関心を深めるとともに、記事について自分の考えをもち、表現していく態度を養う」としてＮＩＥ活動を行った。

全校生徒に向けて行った新聞コーナーの設置では、生徒が新聞を通して、身の回りの社会的事象を知り、関心をもつための良い場となった。また、読んだ記事から自分の意見や考えを発信する姿が見られた。しかし、話題によっては記事に対しての感想だけで終わってしまい、自身の考えや意見を書くことができない生徒もいた。生徒が自分の考えをもつために、話題に挙げる新聞記事の選定や発問の工夫が課題として見えてきた。また、生徒同士が考えを表現しあうには紙面上では限界があり、新聞を起点としてディベートやパネルディスカッションなどの対話的な活動につなげるなど、紙面上では表現できなかった生徒の考えや意見を学級や学年を越えて表現できる場を設定することが重要であると感じた。さらに今後は、生徒会（会誌新聞委員会）とも協力し、生徒自身が記事を選び話題を提示して、それらについて生徒同士が意見を交換し合うような活動を行っていきたい。

新聞の教材化という面では、社会科、国語科で新聞を活用した実践を行ったが、どちらも新聞が補助教材や資料として有効に使われていたことが生徒の姿からも分かった。今後は、教科内のつけたい力に沿って、単元の中で新聞を活用していく授業づくりをさらに行っていきたい。